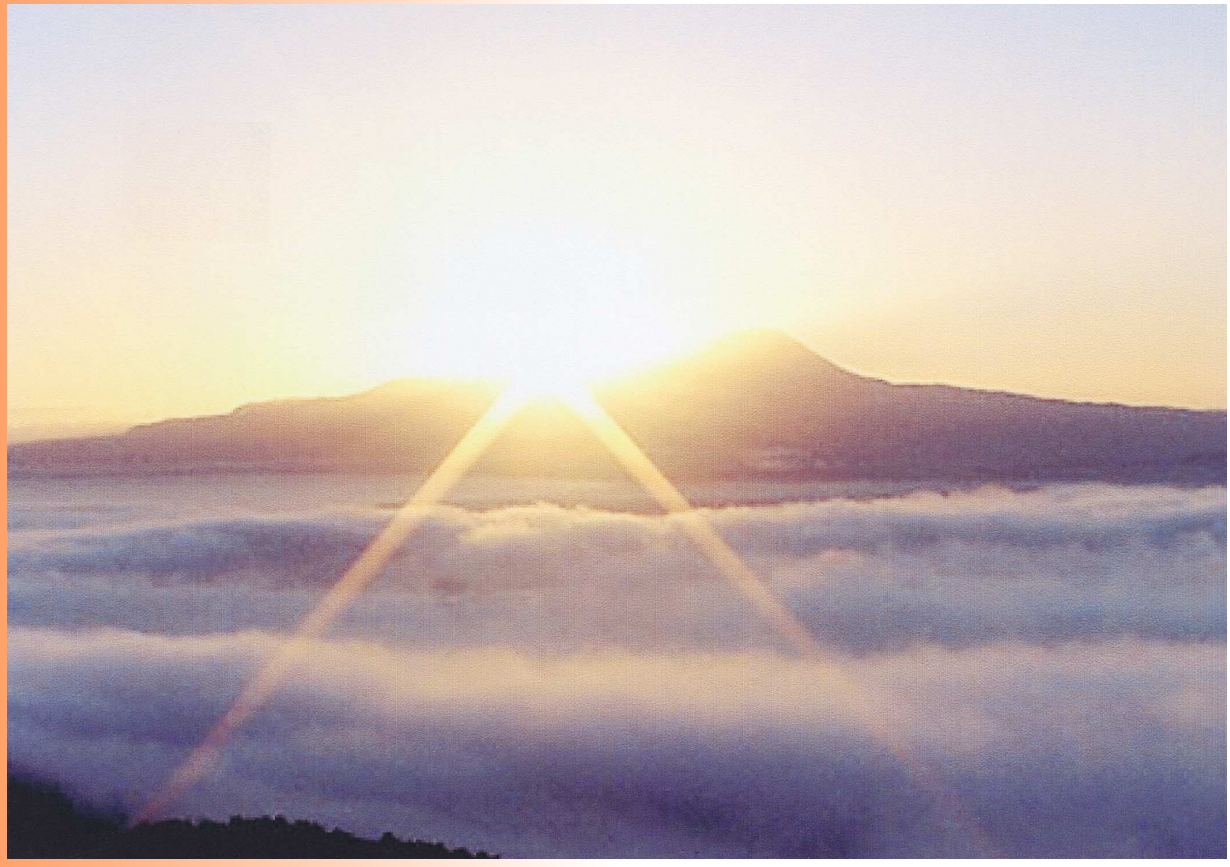
島根大学附属図書館報：淞雲　創刊号　　平成16年2月
Shimane University Library Bulletin : Shō Un　No.1,　February 2004



淞雲

創刊号

2 ● 附属図書館へ行こう　附属図書館長　渡邊貞幸
3 ● 附属図書館分館“医学図書館”への誘い　医学分館長　山根洋右

6 ● 慶尚大学校との職員交流プログラム
8 ● 学術情報資源のデジタル化の進行とその利用
10 ● 出雲国風土記抄データベースについて

13 ● 退職にあたって
15 ● 島根大学附属図書館報「淞雲」創刊！
16 ● 図書館へのお問い合わせはこちらへ

附属図書館へ行こう

附属図書館長　　渡邊　貞幸

人類が文字を発明し記録を残すようになり，そしてそれを収集・保管して，過去から続く広範な智恵に学ぼうとしたときに，図書館は生まれました。最古の確実な図書館の跡は，イラク北部の遺跡で発見されています。紀元前７世紀のもので，アッシリアの王都ニネヴェにありました（私が訪れたときは城壁の復元工事が進行中でしたが，昨年の米英軍の攻撃で今どうなっているのか心配です）。

設立者のアッシュルバニパル王は，碑文の中で自分の勉強ぶりを自慢げに記していますが，その時代に活かすという明確な目的を持って，直接は見聞できない世界の情報を積極的に集めて整理し，編集し刊行することまでしていたといいますから，今日の図書館と比べて何の遜色もありません。アレクサンドリアの有名な図書館（ビブリオテーケ）もそうでしたが，古代以来一貫して，図書館は情報拠点であると同時に，都市や地域の文化的ステイタスを示すシンボルでもありました。

さて，昨年１０月，それまでの島根大学と島根医科大学が統合して新しい島根大学が発足し，それに伴って，島根大学附属図書館は松江キャンパスの本館と出雲キャンパスの医学分館の２館から構成される，大きな組織へと変身しました。その結果，約８０万冊の図書および約１４０００タイトルの雑誌からなる蔵書と，同規模大学の中では抜きん出たサービスを誇る充実した電子図書館的機能などが，全学部の皆さんの利用に供されることになりました。

さらに，本年４月からは装いも新たに，国立大学法人島根大学がスタートします。法人化されると大学がどう変わるのかについてはまだ見えない部分が多くありますが，大学のステイタスを上げるためにも，附属図書館の役割をこれまで以上に大きくしなければならないと考えています。

言うまでもなく，附属図書館は大学における教育と研究を支える知的情報拠点でありますが，同時に，生涯学習・住民サービスなど地域連携の拠点としての役割も担い，また，最先端の学術文化情報を発信・受信する国際的情報流通の拠点でもあります。

つまり，附属図書館はおよそ大学に期待されている機能のすべての分野にわたってその基幹的役割を果たす組織であり，さしずめ大学の頭脳であり心臓であると言っても良いでしょう。このような多岐にわたる諸機能を，メリハリはつけながらも縦横に活性化させることがいよいよ求められており，これは島根大学の「中期目標・中期計画」でも謳い上げられているところです。

島根大学の図書館は，これまで電子図書館化を推進して電子情報サービスを充実させる一方，地域や大学の特色に合わせた独自の情報をデータ化し，発信することにも力を入れてきました。また，蔵書の中には県の文化財に指定されているものなど，貴重な資料が数多く含まれています。このような館の特色や地域の特性を最大限に活かした活動をさらに強化して，山陰に島根大学あり，と言われるような，小さくても光る大学図書館を目指したいと考えています。

図書館職員も決意を新たにしつつ，利用者のニーズに即応したより豊富な新しい情報を提供すべく努力を重ねているところですが，学内外の方々のご支援とご利用，そしてご意見を引き続き賜りたいと思います。

アメリカでは，「引っ越したらまずは図書館へ」という言葉があるそうです（菅谷明子著『未来をつくる図書館』岩波新書）。それに倣って，私は「入学したら」「進級したら」「進学したら」まずは附属図書館へ，と呼びかけます。そして，「卒業したら」今度は最寄りの図書館へ，と付け加えたいと思うのです。

（わたなべ　さだゆき）

ニネヴェの城壁（右奥の人物と比較してください）

附属図書館分館“医学図書館”への誘い
－真理が我らを自由にする－

医学分館長　　山根　洋右

オンリーワンの大学に挑戦する島根大学の知的拠点ポータル

2003年10月に新生島根大学が誕生し，松江キャンパスの本館と連携し出雲キャンパスの分館，「医学図書館」も一段と充実し，本館と分館の機能分担，パートナーシップにより附属図書館は，山陰地方の一大知的拠点ポータルとなりました。21世紀は，知識や情報が大きな価値をもつ「知価社会」となり，とりわけ大学図書館は，知価社会の大脳中枢系に相当する重要な機能を担っております。

独立行政法人化というドラスティクな変革は，硬直化・腐朽化しつつあった大学に自己変革を迫っていますが，医学図書館では，大学再構築の知的情報拠点として教育，研究，社会貢献への支援機能を強化するため，ワーキングループを発足させ，“21世紀医学図書館グランドプラン（図書館基本戦略）”に取り組んでいるところです。

人間尊厳の医療，看護，福祉を科学的に支える学術情報基盤

図書館機能は，資料・情報提供，資料収納保存，情報検索・利用調整，広報・情報リテラシー教育，地域貢献，国内・国際連携など多岐にわたります。現在，医学図書館の蔵書数は，図書約11万4千冊，雑誌3500種，年間受入図書3200冊，年間受入雑誌960種，また，電子図書館に向けた電子ジャーナル導入は，Science Direct, SpringerLINK, InterScience, ProQuest Medical Libraryなど3400タイトルあり，医学部のみならず他学部の教職員，学生の利用に十分対応できる内容を持っています。

特別コレクションには，麻沸散による全身麻酔で乳がんの摘出手術に成功し，我が国の外科に一大革命をもたらした華岡青州の著述書の筆写本を揃えた「大森文庫」，学外の研究者からも注目されている大型コレクションWesternization of Japan（江戸から東京へ－西洋からみた日本の近代化）の825冊からなる「西東文庫」も目玉の一つとなっています。

大学教育機能と情報リテラシー教育（情報活用能力）

医学図書館では，アメリカ図書館協会（ALA）が1999年に提示した9つの達成水準や，米国大学・研究図書館協会（ACRL）が2000年に策定した「高等教育のための情報リテラシ能力基準」を参考に，学生，研究者，医療福祉従事者，住民など利用者への情報リテラシー教育を進めています。

アメリカ図書館協会は，3 領域 9 達成水準を次のように示しています。

A.　情報リテラシー能力を持つこと：
- 1）情報に効率的にアクセスできる
- 2）情報に対する判断能力を持つ
- 3）情報を効果的かつ創造的に利用できる

B.　自主的に学習できること：
- 4）興味ある分野の情報を探索・利用できる
- 5）創造的表現，文献に対する鑑賞力がある
- 6）情報探索法や知識の獲得法に習熟するよう努力する

C.　社会的に責任を持つこと：
- 7）民主的な社会における情報の重要性を認識する
- 8）情報や情報技術に関して倫理的な行動をとることができる
- 9）情報を収集し生産する集団活動に参加できる

米国大学・研究図書館協会は 5 つの基準を示しています。すなわち，

基準1：情報リテラシーを身につけた学生は，必要な情報の性質と範囲を決定する

基準2：情報リテラシーを身につけた学生は，必要な情報に効果的，効率的にアクセスする

基準3：情報リテラシーを身につけた学生は，情報と情報源を批判的に評価し，選択した情報を自分の知識基盤と価値体系に組み入れる

基準4：情報リテラシーを身につけた学生は，個人としてもグループの一員としても，特定の目的を達成するために，情報を効果的に利用する

基準5：情報リテラシーを身につけた学生は，情報利用を巡る経済的，法律的，社会的な多くの問題を理解し，倫理的，合法的に情報にアクセスし，利用する

これらの5基準には，それぞれ数項目の指標performance indicatorが，各指標には成果outcomeがリストアップされています。今や，図書館機能は大学の教育全般にわたる情報リテラシー教育に責任をもつ立場にあります。

利用者ニーズに対応した医学図書館サービス

「利用者ニーズに立脚した図書館サービス」活動は，図書課スタッフの使命感と献身的な活動で，学内外の高い信頼を得ています。最新の統計によると，入館者数は年間14万人，一日平均利用者数430人，年間文献複写数5230件，調査依頼検索数180件，利用指導講習回数191件にものぼります。

図書館サービスのひとつに「親しまれる図書館」活動があります。新入生オリエンテーション，図書館ツアー，24時間図書館開館，ジャーナル管理の中央化，島根県看護職研修会，電子ジャーナル利用講習会，文献検索説明会(講座や病院への出前説明会など)，高校生対象のオープンライブラリー，島根県医療関係機関図書館懇談会，病院の患者図書館，患者情報室あるいは患者情報センターづくりなど，利用者の底辺拡大とともに，コミュニティに開かれた図書館として貢献しています。

急激に進展するIT社会環境と電子図書館機能

情報メディア環境の急激な変革は図書館の将来にも重大な影響を及ぼし，これまで図書館が担ってきた機能や期待されてきた役割が，社会の中で最終的に担保されうるのかを問われる状況にあります。利用者の情報獲得行動に変化が生じ，研究者は論文を入手するのに，必ずしも大学図書館を経由する必要がなくなりつつあります。電子ジャーナル，電子書籍，オンディマンド出版，オンライン書店，ディジタルアーカイブ，電子メールリファレンス，ライブバーチャルリファレンスなどの利用も急増しています。

国際的にも，印刷メディアからネットワーク系メディアへの移行は，「従来型書誌コントロール」から情報間相互作用によるメタデータをはじめとする「ネットワーク情報資源管理」に向かい，1994年国際的な大規模電子図書館プロジェクトが開始されて以来，電子図書館の登場が具体化しています。「電子図書館Digital Library」とは，「資料と情報を電子メディアで提供すること，特にネットワークを介して提供するサービスを中心に据え，従来の図書館が担ってきた情報処理機能の全体，又は一部を吸収し，さらに高度情報化社会の要請に呼応した新しい機能を実現させたシステム又は組織，機関」と定義づけられています（日本図書館情報学会)。

1980年代末から電子ジャーナルは急増を続け，2003年には3万タイトル，内訳は（重複計算）人文科学系40%，社会科学系36%，生命科学系44%，物理科学21%，工学18%各領域にわたっています。電子化された文書の収集・蓄積・検索・管理の必要性，いわゆる「文書ウエアハウジング(Document Warehousing)」も焦眉の課題となり，すでにイギリスやEUでは，文化的活動の所産としての情報資源の構築と提供，そのための包括的文化情報資源政策，生涯学習社会の実現に向けた全公共図書館「全国教育網 National Grid for Learning)」ネット，博物館・文書館・図書館の統合，欧州図書館構想などが進められています。

知識情報資源基本計画と政策形成の重要性

医学図書館強化においても，英国，韓国で進められている政策的，法的，技術的，制度的，経済的な枠組みによる知識情報資源基本計画の制定が急がれます。例えば，英国図書館（BL）は2001年に，将来構想「新しい戦略の方向（New Strategic Directions)」を策定し，図書館機能の課題を明らかにしました。それは，3つの実現戦略（Enabling Strategies）と2つの主要戦略（Main Stragegies)で構成されています。

実現戦略では第一に「利用者戦略」を掲げ，利用者との協働によりサービスの利用可能性と適切性を高め，価値や満足度を高めること，第二の「パートナーシップ戦略」では，関連諸組織との効果的な協力協働関係の構築をあげ，第三の「Web戦略」では，利用者の要望を適切に支えるインターネットサービスの開発をあげています。

主要戦略としては，第一に「コレクション戦略」で利用者ニーズである資料の収集，提供，保存，利用の幅を拡大すること，第二は「アクセス戦略」で，アクセス手段の改善により，より多くの人が英国全体の図書館サービスにアクセスでき，価値の顕在化，学習と娯楽の機会提

供を拡大することをあげています。

21世紀図書館の戦略的経営強化とニューパブリックマネージメント

国際的に21世紀の時代ニーズに対応した図書館再構築の取り組みが活発になっています。その戦略手法としてニューパブリックマネージメントが注目されています。具体的な課題として，この手法を計画的に用いながらイギリス，ドイツ，アメリカ，韓国などが成果をあげています。日本でも，図書館の協力・協働強化 library cooperationに加え，パートナーシップや協同 collaboration, 図書館以外の関係機関との共同事業開発，図書館運営の費用ー効果分析，図書館情報ネットワーク形成，組織経営資源開拓と財務体質の改善，サービス向上と人材開発（革新的，未来志向，サービス志向，コミュニケーション能力，経営手法），博物館・文書館とのネットワーク，行政・企業との協働関係と指導性，ＩＴの導入と発展，学術・産業・教育分野における政府の政策目標支援，ベンチマーキングとベストバリュとベストプラクティスの導入，電子図書館運営，司書職制度と業務革新などの改善が焦眉の課題となっています。

スタッフのエンパワーメントについても，現在，医学図書館では，「ヘルスサイエンス情報専門員」資格取得へ努力しているところですが，先進国では，司書のかわりに，システムライブラリアンが求められ，図書館情報学修士に加えコンピュータ，情報科学関連学士または修士の資格が必要となり，図書館全体の経営，企画，開発，システム維持，人材育成，人事管理，新事業導入への直接的関与が要望されています。

共に生きる誠意に充ち満ちた知識人として

島根大学の優れた教官，職員とともに，学問の道を歩み，さらに知性，感性を磨こうとしている学生の皆さんに，図書館スタッフは，共に生きる誠意に充ち満ちた「知識人」になって欲しいと願っています。“20世紀は殺戮の世紀である”と作家の掘田善衛氏は書いていますが，毎日のように伝えられる人間の野獣化の著しいこの日本という国の知性に対し，21世紀をどの様な世紀にするのか。私の尊敬する作家，大江健三郎氏の言葉を借りたいと思います。

（やまね　ようすけ）

「知識人」と私がいう時，どんな人のことを頭に浮かべているか，まずそれをはっきりさせておきたいと思います。そういっても，私がこれまで会ってきたいろんな知識人の印象を，思いつくまま並べてゆく，ということになるのですが。かれらはみなそれぞれの一生の仕事を持っています。仕事ができるようにするために，若いときから勉強をしました。その勉強をずっと続けています。そしてそれぞれに独特の積み上げ方，深め方をしている人，それが人柄にもなっている人。

専門の仕事をつうじて～表面ではそこから離れているようでも，根もとではつながっている仕方で～自分の生きている社会，世界のことを考えている人。その歴史についても現在についても，自分の意見を持っている人。同じように自分の意見を持っているほかの人を理解することができる人，ほかの人の意見に賛成するか，反対するかは別にして，まず，どういう意見かを理解できる，ということが大切です。

これまでの人生で勉強したこと，経験したこと，いま自分の仕事でいちばん根本にあることを，子供にもわかる言葉で，ユーモアもこめて話せる人。

やっている仕事を中心にして，自分の生き方に責任がとれる人。それは，自分に，また家族に，そして友人たちに，さらに社会に対して責任がとれるということです。そして，ひとりでしっかり立っていることもできるけれど，周囲の人たちと一緒にやってゆく気持ちを持っている人。

さらに，いま現在の自分の生きている社会の，あまり遠くでない未来について，自分としての見通しを持っている人。持てなければ，それを悲しんでいる人・・・。

（大江健三郎「新しい人」の方へ）

慶尚大学校との職員交流プログラム

韓国から日本へ

島根大学での研修を終えて

慶尚大學校図書館　柳瑩晊

島根大学と慶尚大学校間に，職員交流に関する協約書が締結された後の初交流として，島根大学研修プログラムに参加することになった。

初めての日本訪問で胸を躍らせながら韓国の仁川空港を出発した。米子空港上空から見下ろす，大きな湖に囲まれた松江市の風景は本当にすばらしかった。

空港では，去る２月，私たちの大学を訪問された堀尾様と，今回の交流業務の担当者である寺脇様が，私たち一行を手厚く出迎えてくださった。大学到着後，今回の研修プログラムについての簡単なオリエンテーションがあった。私たち一行を歓迎する意味で，大学本部前に韓国の国旗が掲げられていたのが印象的だった。

翌日，研修スケジュールの手始めとして，島根大学の全体概要と法人化についての説明があった。特に私たち一行は法人化に関して多くの関心を持ち，様々な質問をさせていただいたが，懇切丁寧に説明してくださった総務課長様に深く感謝申し上げたい。

午後には石倉様の案内で学内を見学した。ちょうど生物資源科学部長様と職員，学生たちが一致団結して建物周辺の草取りをしておられ，様々な問題で学内紛争を経験している私たちにとって，本当にうらやましい光景だった。

続いて行われた夕方の歓迎会では，島根大学職員と関係者，２０人余りが参席してくださり，和気あいあいとした雰囲気で多くの話を交わしながら，友好を深めることができた。

次の日から始まった図書館研修では，舟木事務長様との再会が本当に嬉しかった。舟木事務長様は，今回の図書館交流プログラムに多くの手助けをしていただいた方でもある。そして，図書館長様をはじめ図書館職員の皆様が参席してくださった中，一緒に昼食を食べながら研修に関する様々な話を交わすこともできた。

図書館分野別研修では，落合様が国立情報学研究所（NII）と図書館関連全国組織現況を詳しく説明してくださり，また，吉岡様(総務係)，新田様(資料受入係)，野津様(学術情報係)，飯田様(情報サービス係)，加本様，福山様(情報システム係)の担当分野の業務に関する説明と案内は，両大学図書館を比較分析する契機になることは勿論，今後の交流発展に役立つ資料となるであろう。

交流プログラムの一環として実施された舟木事務長様のお宅でのホームステイは，日常的な日本文化を理解するのに大変良い機会となり，２日間という短い期間だったが，両国の文化に関するたくさんの話をすることができた。また，家族の皆様の暖かいお心遣いはいつまでもいつまでも記憶に残るはずである。

今回の研修を通した第一の成果は，職員の皆様と一緒に勤務しながら，図書館分野の新しい面を現地で直接体験できたという点だ。二番目は，事務局長様をはじめ関係者の皆様が，今回の職員研修プログラムに多くの関心をお寄せくださり，両大学図書館の発展的，持続的な交流に関して，私どもと意見の一致を見たという点である。

島根大学での１３日間の研修の中で，私は職員の皆様と一緒に生活しながら，何事にも最善を尽くす皆様の姿がとても印象的だった。また，お世話になった皆様の情の深さを強く感じた。私たち韓国人も情の深さを自負しているが，今回出会った日本の方々の情の深さは忘れられないものであった。

職員会館で最後の夜を過ごした私たち一行は，翌日貴重な経験と忘れられない思い出を胸にし，研修期間中，細心の配慮をしてくださった島根大学職員の皆様に深く感謝しつつ，帰国の途についた。今回の研修で出会った島根大学のすべての方々の健康と幸福を祈りつつ，この文を終える。

（Ryu, Young Jil　リュウ　ヨンジル）

日本から韓国へ

大韓民国慶尚大学校研修

島根大学附属図書館　福山栄作

昨年度の島根大学と慶尚大学校間で確認された協議事項に基づき，島根大学からの第１回目の研修に参加する機会を得て，２００３年９月１５日～２７日までの２週間，慶尚大学校で研修を行いました。

慶尚大学校に到着すると台風（台風14号のため韓国南部では相当の被害がでた）のため職員が，ボランティアで片付け等の手伝いのためあまりいないとのことだった。このような活動は，韓国ではよく行われているようで，周辺大学の見学でも同様にボランティアに行っているスタッフが多かった。

（晋州橋）

慶尚大学校図書館もそうだが，周辺の図書館見学時に感じた韓国大学図書館の印象は，マルチメディアルームが充実しており，インターネットを使った授業等を学生達がいつも利用していることだ。この授業を配信しているサーバはソウルにあるようで，学生達が個々に利用契約をすることで，いつでも利用できる。

慶尚大学校とソウル大学では，両大学で生産された論文を電子化し，学内から相互に検索閲覧することが出来るようになっている。著作権処理から電子化・公開までのプロセスも整備されており，電子図書館が実現している。

電子ジャーナルは，KESLIという機関が中心となり，コンソシアムを形成し，サービス，契約内容の説明会が，提供業者と全国から担当職員を交えて行われる。これを基に電子ジャーナル提供業者との直接契約を行っている。この方法は，各大学により適したモデルの提案や選択が行えることと，契約内容の好条件での一般化が有利に行えると思われる。また，電子ジャーナルを利用する仕組みもKESLIにより統一的に提供されている。なお，データベース系については，KERISが中心となって同様の取りまとめが行われている。

（伝統的な韓国料理）

２週間という短い期間ではあったが，韓国の文化にも触れることができた。すぐ隣の国だが，知らなかったことが非常に多いことを感じた。このような研修により，日韓の情報交流が盛んになれば，より理解が深まると思う。

最後に，本研修で大変お世話になった柳さんをはじめ慶尚大学校図書館の方々と，本学関係者の方々に深く感謝いたします。

（ふくやま　えいさく）

学術情報資源のデジタル化の進行とその利用
一次/二次情報，リンク機能，VoDサービス

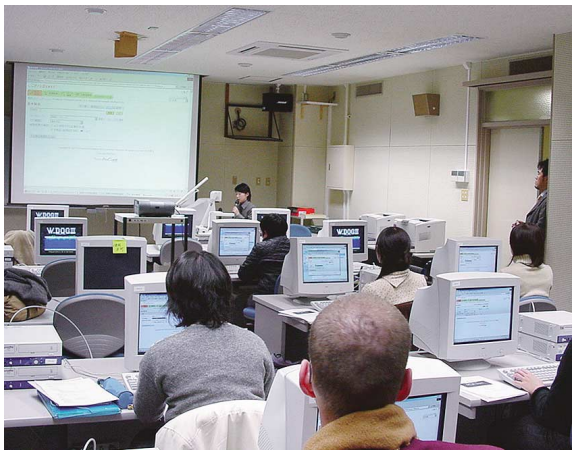
電子情報係　　加本純夫

近年，データベースや外国雑誌を中心に，従来の紙／印刷／製本というアナログ状態から，デジタル変換したパッケージ（CD-ROM,DVD等）商品として提供されはじめ，最近では情報処理技術の高度化やインターネットの高速化により，大容量の学術情報系デジタル・コンテンツも，学内LANから直接アクセスできるようになってきました。

学術資料を収集，整理，保管，提供する本学図書館でも，所蔵資料を探すためのツールであるカード目録（二次情報）について，昭和63年からOPAC（Online Public Access Catalog）データベースとして蓄積し，多様で迅速な検索機能や二十四時間体制での同時アクセス，データの即時更新性などの特性により所蔵資料（一次情報）の活用に重要な役割を果たしています。資料情報の全点入力により，学内に「何があって，何がないのか」，さらに「現在，何処にあり，すぐ利用できるのか」などの情報提供は利用者サービスに直結しています。現在，書庫内や研究室にある比較的古い図書資料が未入力状態ですが，多様な歴史的資料を研究の主なベースとする人文・社会系分野からの要望も強く，早急に解決すべき課題となっています。

理工学，生物・生命科学分野の研究活動では図書資料より学術雑誌論文の利用にウェイトが置かれていますが，学問領域の多様化と拡大，細分化等により，情報洪水とも呼ばれる膨大な量の学術情報資源が，インターネット上で流通しています。ここ数年の学術情報生産量は，過去数千年に流通，蓄積されたそれを遙かに凌ぐと言われ，分野別データベースや，必要な情報を分類・整理し，効率的に探し出す機能を備えたサーチエンジン等も必要になっています。

外国雑誌論文の世界では，流通量の増大と共に，これらを網羅的，効率的に利用するために従来から各種データベースが提供されていました。原文献（一次情報）についても，十年程前からデジタル化が急速に進行し，現在では大規模出版社や学会各種ベンダーから，バックファイルを含む膨大な量の電子ジャーナルがインターネットを通じて提供されています。各電子ジャーナルは固有のプラットフォームから提供されるため，利用にあたっては微妙に異なる検索システムに慣れる必要があります。



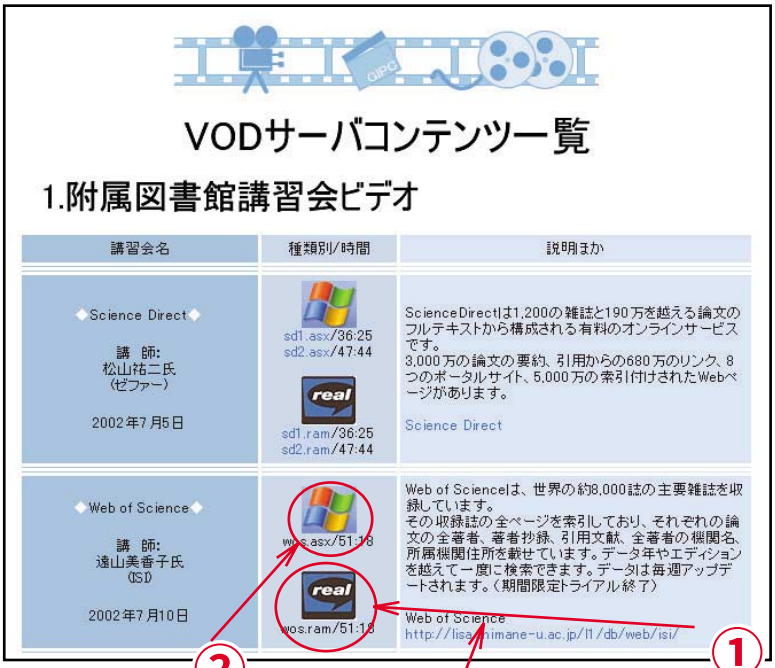
ProQuest：*ARL, ML* 講習会*(2003.12.8)*

デジタル・メディアへの移行は，適正な規模のパソコン，各種ソフトや高速ネットワークなどの情報利用環境も必要であり，また，多様な検索システムにより流通している学術情報を選択，分析，評価し，使いこなす“情報リテラシー”能力も高度情報社会では不可欠の要件となっています。全国の大学でも情報教育関連の科目等で積極的に対応がなされ，所謂“情報デバイド”を解消する努力が続けられています。

図書館では，導入データベースや電子ジャーナルの利用促進，デジタル学術情報の理解を深めていただくため，提供元インストラクターの協力により各種講習会を数多く開催してきました。また，授業や会議等との競合で利用講習会に参加できない利用者のため，講師陣の了解を得て講習会内容を録画し，総合情報処理センターのVoDサーバからストリーミングサービスも行っています。（松江・出雲両キャンパス）初期版のため映像や音声に不明瞭な部分もあり

ますが，添付マニュアルを参照しながら各サイトのプラットフォームにアクセスし，マイペースで行う自学自習システムとしても利用できます。

●総合情報処理センターホームページ
（教職員／学生用目次→　VODサーバコンテンツ）



＜提供VoDタイトル一覧＞

- **電子ジャーナル**
  Elsevier, Blackwell, Cambridge
  IEEE, Kluwer, Springer, Oxford
  Wiley, Gale, ProQuest: ARL,ML
  ACS ProQuest: DD etc.
- **データベース**
  Current Contents, Web of Science
  Journal Citation Reports, JICST
- **選書データベース**
  BookWebPro, Knowledge Worker
- **その他**
  電子ジャーナルの概要
  種類，契約形態，利用範囲，機能
  （タイトルは随時更新しています）

●附属図書館本館ホームページ
（ホームページ→　講習会ビデオ）

①Real Player版
　Windows, Mac,UNIX系
②Windows Media Player版
　Windows系
③電子ジャーナル群URL
④講習会で使用したテキスト，
　マニュアル類

＊ビデオの閲覧には，パソコンのOSに対応したソフトウェアを予めインストールしておく必要があります。（Free Soft）

一次情報／二次情報間リンクについては，各データベースの検索結果画面からシームレスに原文献が利用できるよう，購入電子ジャーナルやOPACへのリンク設定を行っています。

・Current Contents Connect, INSPEC, Magazine Plus(和雑誌文献), JDream(科学技術文献)
・WebSPIRS(Agricola, ERIC, GeoBase, MLA, MathSci, PsycINFO)

多様なプラットフォームから提供されている電子ジャーナルについては，図書館ホームページの“e-Journals Access Page”と“SwetScan”で，情報検索後，電子ジャーナル本文の呼び出しや，OPACリンクによる冊子体の学内所蔵調査，検索結果のテキストデータを文献複写依頼フォームに流用する機能など，雑誌情報の総合的ナビゲーション機能を提供しています。どうぞご利用ください。

（かもと　すみお）

出雲国風土記抄データベースについて

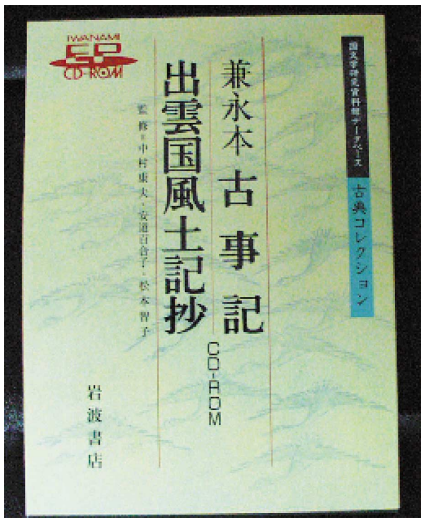
国文学研究資料館教授・研究情報部データベース室長　　中村　康夫

◆ 島根大学附属図書館蔵『出雲国風土記抄』について

国の文化は多様な文物によって保存され，伝えられている。わが国最古の国史である『日本書紀』の成立に先立って完成した『古事記』は７１２年の成立であり，８世紀初頭のわが国の文化レベルの高さが偲ばれるというものである。『古事記』の完成は，国の文化水準の高さを誇示しうるものとして，携わった人々は相当自信を深めたに違いない。

その勢いがあってのことと思われるが，『古事記』成立の翌年，国は地方に対して官命を出し，地誌や産物，さらに地名の由来などについて報告させた。その報告が風土記である。その頃，国の中央が誇示する文字力に対して，地方がどこまで確かな文字力を保持してその要請に応えたのだろうか。

古代の文献が今日にまで伝わるについては，さまざまな偶然によって左右されたこととは思うが，風土記のうち完本として現存するものは『出雲国風土記』のみであり，出雲という土地の文化度の高さや，歴史に対する気概といったようなものが感じられる。



風土記として残っているものは出雲以外にもある。脱落や省略を残しながらも，常陸・播磨・豊後・肥前の風土記が伝わっており，出雲を合わせたこの５つの風土記を特に五風土記という。他にも逸文が確認される風土記は多いが，残された資料に恵まれている『出雲国風土記』が，より研究しやすい形で出版，公開され，研究が進展することが，他の研究をより活発にすることに繋がるのである。

島根大学附属図書館が蔵する桑原文庫本の２種の『出雲国風土記抄』（４冊本と２冊本）は，風土記本文に対して江戸時代に注釈の施されたものであり，特に４冊本は『出雲国風土記』の本文を全文残している点で，風土記本文および注釈本文ともに貴重とされている。学会の期待に応えて，このたびのデータベース出版に協力を惜しまれなかった島根大学の高い見識に対して，心からの敬意を表するものである。

◆ データベース

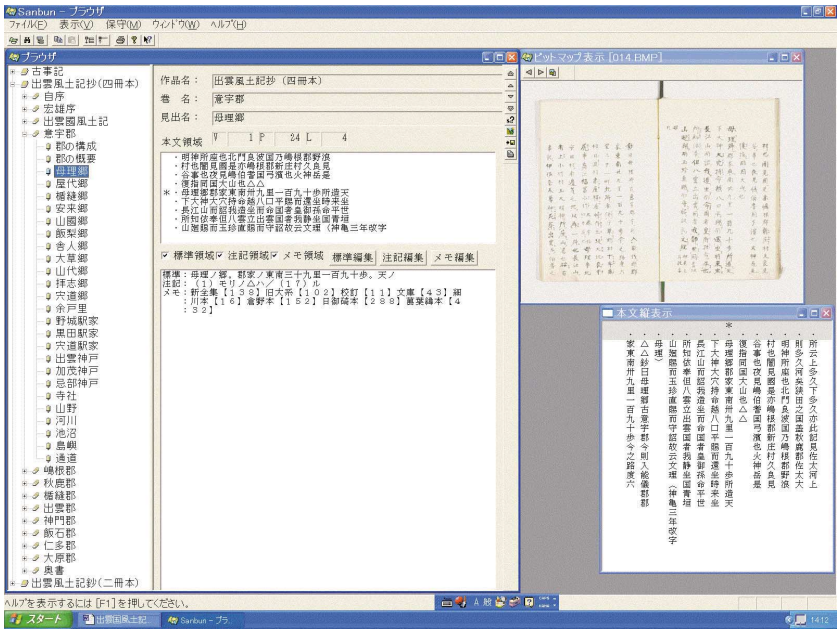
データベースは情報に構造を持ち，それゆえ大量の情報に対して機能的な検索ができたり，検索結果を便利に分析，整理できたりするものである。

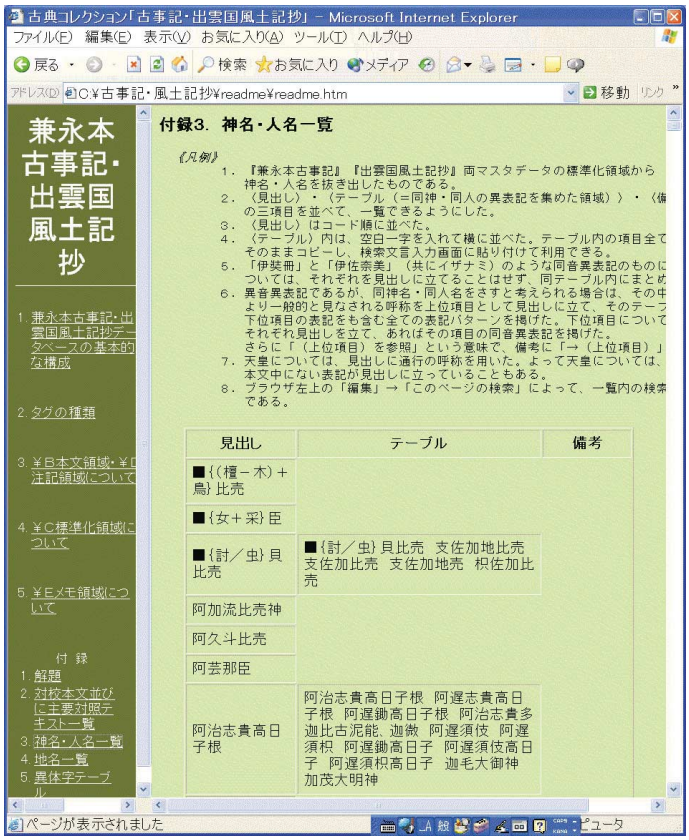
このたび，『出雲国風土記抄』がデータベース化された仕様は，国文学研究資料館が構築し，岩波書店が出版している“古典コレクション”の仕様であり，特徴としては，次の５つの項目が挙げられる。

① テキストデータと画像データから成っており，相互にリンクが張られているので，表示されているテキスト本文から直ちに原本画像の表示に飛べる。
① テキストデータは４層に書かれており，１行の本文（原漢文）に対して訓読文・振り仮名等の傍記・参考文献の位置情報がリンクされているので，相互に参照しながら研究を進めることができる。
③ 検索結果が整理して取り出せ，引用が容易である。
④ 異体字および人名（神名）・地名についてはシソーラステーブルが用意されており（CDのreadmeフォルダ），それらを検索時に活用することで，検索漏れを防いでいる。
⑤ 原漢文のところ以外は書き込み編集ができるので，調べたことを書き込みながら，データベースを育てていくことができる。

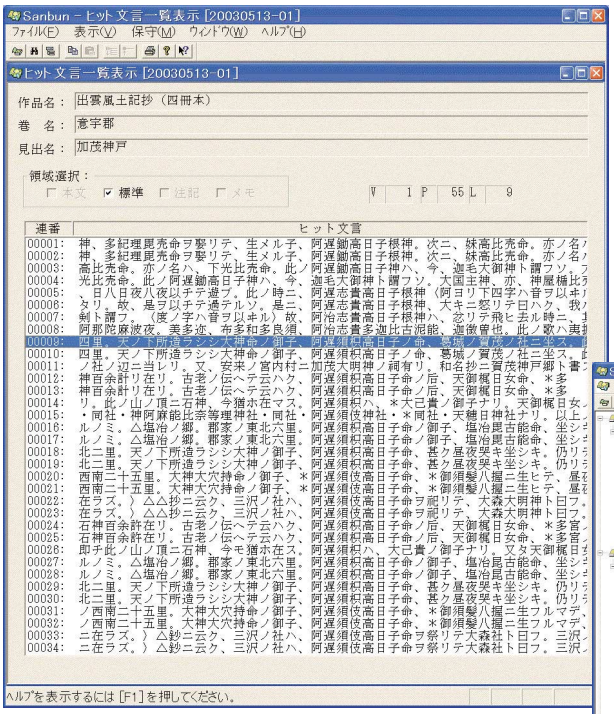
以下に，データベース検索システムの画面を紹介する。

左に目次が階層化されている。ダブルクリックでそこの本文へジャンプする。
反転しているところは「母理郡」。訓読文・振り仮名等の傍記・参考文献の位置情報も表示されている。右に底本の画像を出し，下に本文の縦書き表示を配したところ。

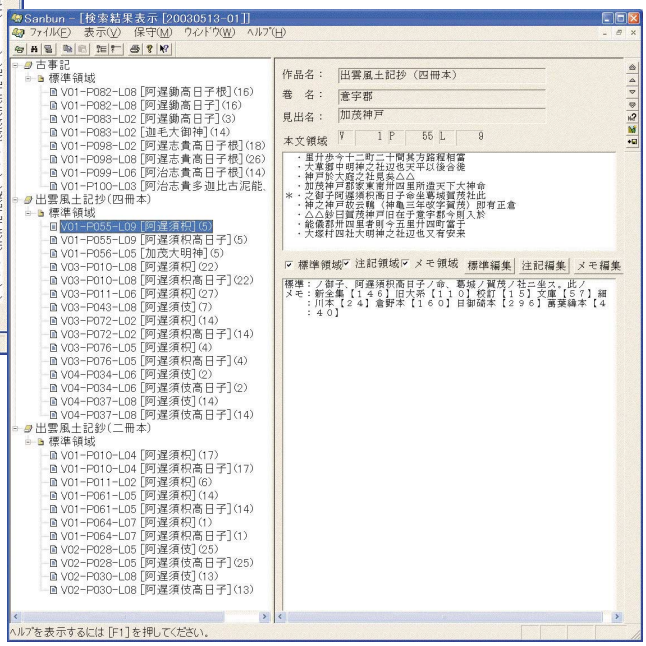




「人名・神名一覧」を表示したところ。異表記の並んでいるところをコピーし，検索項目にペーストして，異表記すべてを検索する。



検索結果一覧の画面。“ヒット文言一覧”のモードで表示。



検索結果一覧の画面。“本文表示”のモードで表示。ここから，それぞれの箇所の画像も表示できる。

◆ 古典コレクションは参加型のデータベース

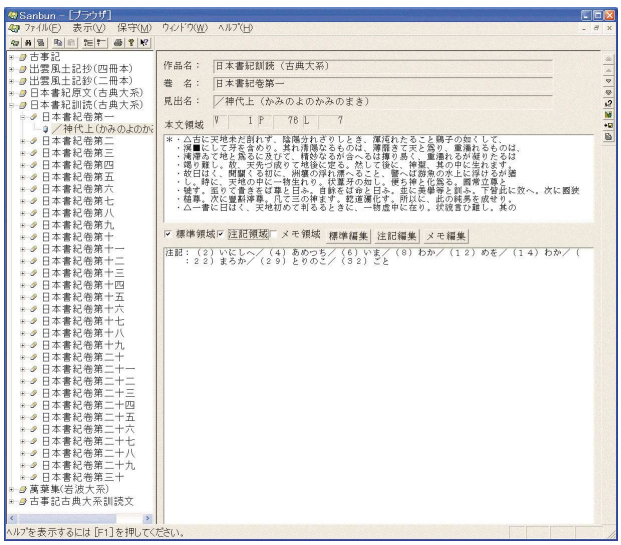
国文学研究資料館の古典コレクションデータベースは，ユーザ参加型というのが特色である。

書き込みによる編集参加でデータベースを成長させることができることは先に書いた。そういう参加以外に，このデータベースはマーキングルールを公開（readme.htmlで表示）しており，同じルールで記述すれば，他の作品，例えば『日本書紀』や『万葉集』などもここに登録して利用できる。こうすれば，一気に串刺し検索ができる。

最後に，国文学研究資料館からダウンロードできる旧日本古典文学大系の『日本書紀』と『万葉集』にマーキングを施し，登録したところをお目にかける。データベースは使い込むことでより便利な世界が広がることをご理解いただきたい。

古典大系をこのシステム用に変換する方法は，国文学研究資料館のＨＰの“研究者中村康夫”のページ
http://www.nijl.ac.jp/~nakamura/index.html
をご覧いただきたい。

（なかむら　やすお）



退職にあたって

退職するにあたって

医学分館専門員　落合　輝満

昭和３７年に島根大学附属図書館に勤務してから，４２年間にわたり大学図書館の仕事に携わってきましたが，この３月に定年退職することになりました。

図書館の建物は３ケ所に代わり，最初は現在の守衛所の北側付近にありました。木造平屋建に閲覧室，事務室，館長室があり，渡り廊下で木造２階建の書庫，それに増築した鉄筋２階建の書庫がありました。暖房は石炭ストーブが閲覧室と事務室にあり，バケツで石炭取りにいったことを思い出します。一般図書は全て書庫にあり，係員が図書の出納を行っていました。昭和４０年３月に附属図書館及び人文社会科学研究室が新築されました。そして昭和５３年１月に現在の独立した図書館となり，また昭和５９年１２月には増築があり，この間数回，図書館の引っ越し作業を行いました。

図書館職員にとって大幅な転換を迫られたのは，業務の電算化でした。図書館も何れは電算化されるであろうと，昭和５６年６月に「附属図書館電算化検討委員会」を発足させました。他大学の情報等を入手しながら検討を開始し，組織を変遷させながら検討を継続していきました。

昭和６３年２月，図書館業務を４本柱の一つとして，情報処理センター（旧電子計算センター，現在は総合情報処理センター）が設置され，図書館にも端末が配置されて業務の電算化に着手しました。この電算化によって，図書館は大きく様変わりしていくことになります。

従来，蔵書を検索する場合はカード目録に頼っていましたが，電算化後は，カード目録を凍結してＯＰＡＣ（オンライン蔵書目録）に移行していきました。当時の検索講習会では，キーボードの説明から始まり，漢字・かな・ローマ字の入力方法に相当な時間をかけており，常に数人の補助者をおいて，受講生に入力の方法から教えていました。

相互貸借（文献複写・現物貸借）業務では，図書館に必要な文献を所蔵していない場合，担当者が所蔵している機関を冊子体目録でさがし，葉書で依頼をしていました。何かの事情で謝絶の葉書がきた場合，そのたびごとに他機関へまた葉書で依頼する方法をとっていましたので，文献を入手するまでに大変な時間がかかっていました。現在はネットワークを利用して，所蔵機関があっという間に検索でき，その所蔵機関に順位をつけて依頼することができます。第１位で依頼した機関で謝絶されても，自動的に第２位の機関に転送されるというシステムになっています。あの当時と比べると，文献複写の入手は驚くほど迅速になりました。

そして平成１５年１０月には，島根大学と島根医科大学が統合されました。旧島根医科大学附属図書館は附属図書館医学分館となり，私は１０月から医学分館へ勤務しています。

近年の電子図書館的機能の充実には，目を見張るものがあります。電子ジャーナルの導入等により，利用者も図書館員も，高度情報化へ対応する力がますます必要になっていくことでしょう。

ここ数年，私は環境整備の一環と考え，大学周辺の公道，大学構内，図書館周辺のゴミ拾い等を行ってきました。自宅が松江キャンパスに近いこともあり，退職後もボランティアとして，大学周辺の公道のゴミ拾い等をしていきたいと思っています。

平成１６年４月からは，「国立大学法人島根大学」となる大変革がありますが，図書館職員の方々が一致協力され，図書館が益々発展することを祈念しております。

（おちあい　てるみつ）

落合専門員には，
図書館報の写真で大変お世話
になりました。図書館で撮られた
写真は数知れません。

定年退職するにあたって

医学分館 医学情報サービス係長
渡部　洋二

歌の文句ではないが，“定年なんぞまだまだ先のこと”と悠長にサラリーマン生活を送っていたら，他人事ではない後２ケ月もすると４２年間に及ぶ役目を終えて，満期除退（広辞苑にはありません。小生造語）となる予定です。

マラソンの距離４２．１９５kmに例えるならば差し詰め今頃は，４２kmを走り終え最後の１９５mを残し，ひたすらゴールを目指し，この淞雲が出るころにはフィニッシュをしているころだと思います。

若い人からみれば「化石」と思われるかもしれませんが，戦前生まれ（戦争のことは知りませんが，もの心ついたときは終戦後の想像を絶する食糧難の時代でした）で昨年の誕生日に還暦を迎えました。

日本が戦後の復興を終え，高度経済成長期に入ろうとしていた昭和３０年代後半に高校を卒業し，青雲の志をいだき民間会社に入社しましたが，２年間で方向転換を余儀なくされ，公務員生活へと転身しました。最初は公立中学校の事務職，そして公立高校の事務職へと替わり，当時の島根県立農科大学の国立移管に伴い，何名かの県職員と一緒に，昭和４２年に旧島根大学に採用となり国家公務員として再スタートを切ることになりました。

附属図書館への配置換えは採用から３年後でした。当時の図書館は，今の法文学部棟に併設された閲覧室，事務室，及び閉架書庫（今の汽水域研究センター）からなる建物でした。

旧島根大学在職中の想い出は，学園紛争，図書館における運用係で資料の出納業務（利用者が目録カードを引き，閲覧希望とする図書を請求用紙に記入してカウンターへ提出し，係員が閉架書庫の１層から５層の中から探しだして閲覧者に渡す作業）の毎日で足腰が鍛えられたことと，配置換えになった目録係では，図書の分類・目録がおよそ３日位のサイクルで１０年１日の如く連続する業務を繰り返し，繰り返し行って（作成したカード数は何万枚になりましたでしょうか？）精神的にタフさを身に付けたことです。

昭和６０年４月１日付けで，旧島根医科大学附属図書館（現：附属図書館医学分館）へ異動となりました。これまでの総合図書館から医学専門図書館へと９０度位の方向転換で最初は戸惑いましたが，館員の方の親切でやさしい指導と惜しみない援助で，集密書架の導入，業務電算化，２４時間開館，島根県医療関係機関等懇談会の設置，そして利用者教育の充実等の仕事をさせて頂きました。

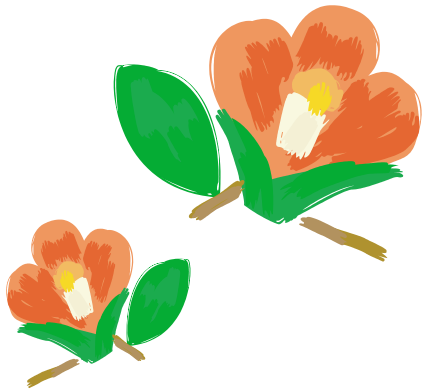
とりわけ最後の２年間は，利用者教育のチーフとして，浅学非才の者が大学の教壇にも立たせて頂いたのも，今になってみると良き思い出となっています。

好きな言葉は，月並みですが「人事を尽くして天命を待つ」と「逃げない」です。書いたり口で言うのは実に簡単で，実行となるとなかなかですが，それに近付くよう努力をしていけばきっと道は開けます。

今年４月からは，国立大学が独立行政法人となり，震度５位の激震が襲うかと思いますが，優秀な皆様が英知を結集されればきっと難関は乗り切れると信じています。

これまで長い間皆様に大変お世話になりましたことを，心から御礼申し上げます。

（わたなべ　ようじ）



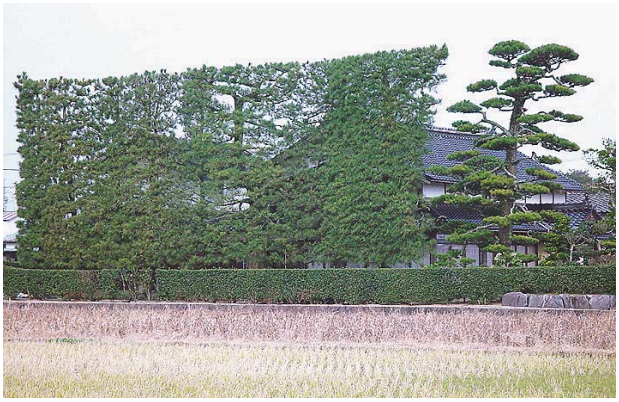
島根大学附属図書館報「淞雲」創刊!

昨年１０月の統合を期に，新たに図書館報「淞雲」を創刊することになりました。本館・分館の相互協力のもと，図書館の利用法，蔵書や新しい電子メディアなどの紹介，また利用者のみなさんの図書館活用法など，情報提供や意見発表の場として，よりわかりやすく，親しみやすい広報誌をめざしていきたいと考えています。

＊旧島根大学附属図書館報「松風」は，第６９号(2003)をもって終刊しました。

島根県の木は「クロマツ」です。島根大学が位置する島根県東部は出雲地方と呼ばれ，松江，出雲キャンパスのちょうど中間には，米どころ出雲平野が広がっています。出雲空港から街へ向かう道すがら，田んぼの中には，出雲地方独特の「築地松」に囲まれた農家が点在しています。

斐伊川は古代より暴れ川で，洪水の多かったこの地方では土を盛った上に家を建て，そのまわりにクロマツの木を植えて柔らかい土地を安定させました。また冬の強い季節風を防ぐ働きもありました。



（築地松のある農家）

築地松を剪定する職人を「陰手刈り(のうてごり)職人」と呼びます。12～13mの高さに梯子を掛け剪定していきますが，その仕上がりは，松の枝が透かし模様のように広がり，左右上部が僅かに反りあがり，堂々とした風格と，芸術作品のような美しさを併せ持っています。後世に残したいふるさとの風景の１つです。

出雲地方はまた，国譲り，八俣大蛇など，数々の神話を残す“神々の国”でもあります。“出雲”はその名のとおり，美しい雲の沸き出づる地で，特に宍道湖に沸き立つ雲をバックにした夕景の美しさは息をのむほどで，神々しささえ感じられます。

ラフカディオ・ハーンは，日本に帰化する際，“小泉八雲”と名乗りました。雲と水の美しい松江の地を“古き良き日本”と紹介しています。

地域にどっしりと根を下ろし，吹きつける寒風にも負けないクロマツの強さは，この地方の人々の姿にも通じるものがあります。

大学図書館は学術情報発信拠点として，地域への更なる貢献を期待されています。大学に吹き込む新しい風は追い風となってくれるでしょうか。この木のように強く美しく，地域に根ざした，期待に応えられる図書館でありたいと願っています。

図書館へのお問い合わせはこちらへどうぞ。

本館（松江キャンパス）

総　務　係 (2710)　(0852)32-6083 tos-soumu@jn.shimane-u.ac.jp	資料の購入契約，情報検索講習会室の利用申込みに関すること
図書情報係 (2720)　(0852)32-6084 book@lib.shimane-u.ac.jp	図書資料の選書，購入申込み，受入，支払い，資料購入予算に関すること
雑誌情報係 (2760)　(0852)32-6082 jou@lib.shimane-u.ac.jp	雑誌の購読／中止申込み，受入，支払い，研究室からの雑誌返却，製本，雑誌の目録に関すること
電子情報係 (2730)　(0852)32-6085 cat@lib.shimane-u.ac.jp	図書の目録，電子ジャーナル，データベース，ネットワーク，ホームページに関すること
利用サービス係 (2740)　(0852)32-6086 sabisu@lib.shimane-u.ac.jp	図書館利用，資料の閲覧，貸出／返却，研究室からの図書返却，書庫の利用，グループ閲覧室／職員閲覧室の利用申込み，学外者の利用に関すること
学術情報係 (2750)　(0852)32-6087 sanko@lib.shimane-u.ac.jp	資料の利用，参考調査，利用者教育，資料の複写，学外文献複写／現物貸借，AV資料／マイクロ資料の利用申込みに関すること

医学分館（出雲キャンパス）

医学情報管理係 (2092)　(0853)20-2092 m-kanri@lib.shimane-u.ac.jp	図書資料の購入申込み，雑誌の購読／中止申込み，受入，支払い，予算，目録，製本，電子図書館，ネットワーク，ホームページに関すること
医学情報サービス係 (2094)　(0853)20-2094 m-library@lib.shimane-u.ac.jp	図書館利用，資料の利用，貸出／返却，学外者の利用，参考調査，利用者教育，資料の複写，学外文献複写／現物貸借に関すること

［表紙写真　落合専門員］

島根大学附属図書館報「淞雲」　創刊号
平成１６年２月発行

発行　島根大学附属図書館報編集委員会

本　　館　〒690-8504　松江市西川津町1060
TEL（0852）32-6083　FAX　32-6089
医学分館　〒693-8501　出雲市塩冶町89-1
TEL（0853）20-2092　FAX　20-2095